

## 維新前夜

大塚 喜子

幼なじみの登志子ちゃんもお嫁に行ってしまった。ため息をつきながら西側の障子を開けると、ひと風吹くごとに目の前に広がる稲穂の緑が、波打って彼方に引いていく。合間をアメンボーが泳ぎ、小さなアオガエルが跳ねて、また跳ねて……稲の穂先にチヨコンとしがみつく。みんな生きていることが楽しそうで、得意気にみえる。

見晴るかす先の、ひとときわ高い櫟の木の下に登志子ちゃんと一緒に通った手習い所が見える。タミの溜息を、裏山の蟬時雨が、かき消した。

嘉永六年に江戸近くの港にペリーとかいう異人さんが来て以来、江戸と京都は、すっかり変わったらしい。米子も変わってしまった。

文久二年にお殿様（鳥取藩主・池田慶徳）が隣の石見藩の典医の森様（森静雄）を伴って上洛、お公卿様（岩倉具視）に会ったそうだ。山陰三藩（石見、松江、鳥取）は徳川様の直轄藩なのに、將軍の兄でもあられる慶徳さまが、朝廷方を訪ねたとは俄かには信じられないが……皆がそう噂している。

石見の「御山」から出る銀と銅の産出量は年々少なくなっていて、馬上のお役人が槍を持って入った坑道を、昨今は湧き出る地下水道の上を板に坐して入坑している。慶応二年に、銀山奉行所は代官所に格下げになった。

隣の松江藩の「たたら鉾」も同じで、且つての勢いはない。薩摩藩にイギリスとか言う外国の人が鉄工所をつくって、鉄砲や軍艦を製造しているのだとか？外国の人にお武家様の刀剣が打てるのだろうか？其れよりも、何故お武家様とお公家様が「攘夷・攘夷」と言いながら争っているのだろうか。

タミは腹に力を入れて田んぼに向かって大声を出した。大人げないと分かっている。あの色黒で背が低く、鈍重な登志子でさえ嫁入りした……。登志子ちゃん、絞りの生地、揃いの茶巾を作ってくれたけど、持ち歩く気持ちになれなくて仕舞い込んだままだ。でも、口先だけでないお祝いはチャンと言えた。今になってみるとそれは嘘めいていた気がする。

私だって、私も……清次郎さまと所帯を持ちたい。涙ぐみながら障子を閉めて、文机の小引き出しに仕舞いこんだ手鏡を取り出した。普段は鏡を見ない

ようにしているので、手にしたのは久しぶりである。ひろい額、山なりの眉。その下の頬と顎の下をつくづくと見た。

「タミ、お前は可愛い娘だよ。疱瘡なんぞに負けるんでないよ、お前は命拾いしたんだ。」一つ年下の弟はあの時に死んだのだから、母が言うように自分は運が強いのもかもしれない。そう思うことにしている。

「見てくれはちよつと悪くなったけど、お前は根性良しだ。賢い子だ。下を向いて歩くんでないよ」とも母は言った。だから幼いころからタミはいつだって上を向いて機嫌よく振舞ってきた。

三年前に母さんが死んでからだって、タミは俯かないで生きてこれた。手習い所の仲良し達は、嫁に行くとき自分の所帯が大切になって、タミを次第に忘れていく。なんてったってこの顔だもの……。

改めて手鏡に見入った。目の脇から頬、顎の下にかけていくつももの痘痕がある。特に左頬骨の所の楕円は色も濃く隠しようもない。疱瘡で多くの人が命を落とした。だから、生き残った自分は運が強いと言われても……。タミはまたもや溜息をついた。やはり鏡など手にしなければよかつた。

母が亡くなって、タミが七歳の時、父と兄は「家内の子守や、家の衆の下働きばかりしてはダメだ。タミには手習いをさせる」と言つて、筆や紙や教本を揃えてくれた。始めの頃は無邪気に手習い所に通い、手取り足取り習っていたが十年もすると

「タミさんは感心だね。何時も良く練習しているね」と褒めてくれる五歳年上の清次郎さまの声を聞くのが嬉しくて、只々清次郎さまに褒められたくて、夢中で墨をすった。やがて、墨の香りに重なる男の匂いを意識するようになると、否応なしに顔の痘痕が気になった。

清次郎は書が優れているだけでなく、学問や時世にも明るい。その上、武道に滅法優れている。清次郎が聞かせてくれる「徒然草」「出雲神話」はどれも然程に理解出来なくても、朗々とした澄んだ声には心底聞き入った。

商家の次男の清次郎は、時折、わざと毛虫の様な太い眉を上下させて皆を笑わせる。その眉毛も大好きだ。勿論、立ち姿も好きだ。二十数人いる生徒の中で、しばしば清次郎はタミに顔を向けてくれる。タミはその視線を逸らさない。なのに、一ヶ月前

「タミさんは古今集の清書も遂に済ませたね。見事だった。充分力もついたヨ」そう言った後に続けて

「月が変わったら、自分は『尚徳館』で学ぶことになる」「それは、おめでとうございます」

声が震えた。タミから遠ざかってしまうのに、なにがめでたくあるう。ここから四里も離れた『尚徳館』で武士でない商人の清次郎さまが学ぶとは……。

山陰三藩は江戸の始めより学問が盛んな土地ではあつたが、徳川斉彬公の次男の慶徳さまが、鳥取藩の池田家に御養子に入られてから、やたらと学問と武道が奨励されるようになった。村の子供たちは七歳になると手習い所に通う。武士の子は当然としても、鉄師（たたら）や、山師（銀山）や、農家や商家の子等までもが当り前の様に手習い所に通つた。働き手の子供を出したくない、出せない親もいる。すると、役人が直接談判に来る。結局親は渋々子供を手習い所に通わすことになる。

手習い所で優秀な成績を収めると藩校『尚徳館』で更に学ぶことが奨励される。藩校で学ぶことが出来るのは、武家の当主とその子弟で、徒士以下の農工商の子たちの入学は許されていない。

「藩校には新たな道場と寄宿所もできるよ。成績が優秀だと妻帯も許されるんだヨ」清次郎はそうも言った。

清次郎さまに嫁さんが来る……。ならば、これからは清次郎さまと楽し気に話すことが出来なくなる。

登志子が嫁入りしてからタミの根性は捻くれて素直になれないでいる。こんな胸の内を清治郎に見抜かれるのが怖い。だからタミは「おめでとうございませ」と言う以外に何も言えなかった。

タミの筆の腕がどれほど上がったも、タミがどれほど明るく楽し気に振舞つても、どれほど兄や父が励まして、庇ってくれても、嫁にしてくれる人が現れるとはおもえない。タミは改めてそう思った。

去年、兄の嫁さんが三歳の坊を残して死んだ。大人しく、目立たない人で、タミや小作人らにも親切だった。母に続いて兄の嫁が死んでも、一家は悲嘆にくれる暇がないほど忙しかった。女房に死なれて、黙々と木材の切り出しや農に精を出す兄が哀れだった。坊は目元が爽やかで兄嫁に似ている。

登志子が嫁に行き、清次郎も『尚徳館』に行ってしまうとなれば、坊の不運が自分の不運にも似ているようにも思える。

坊の世話は手伝い女達が見ていたが、それは昼間だけのこと、夜になると、決まってタミの布団に潜り込んできた。

「ねえタミ・ねえタミ」と襟元を掴まれば、無下にできない。鬱陶しく思つても、早く寝かせたくて、歌つたこともない子守唄を歌うと、坊はそれを何度もせがむ。挙句にタミの頬骨当たりの黒ずんだ楕円を小さな指で臆面もなく撫でた。

「ねエねエ、これなアに」

「これはね。アバタって言うんだよ」

「アバタ？痛い」

「痛くなんかないよ」何度同じ会話をしただろう。そのたびに兄は「やめろ」と坊を叱り「早く寝かせてしまえ」とタミをたしなめた。

「又父ちゃんに怒られちゃったね」と二人でオデコをくつつけあいながら、抱き合う時の何と楽しいことか。

母親気取りで、村の衆に、自慢気に子育てを話すのも楽しかった。それが、タミの生きがいになっていた。

皆のように自分も所帯を持ちたいと、せつに願っても叶えられないもどかしさを、坊のあどけなさが忘れさせてくれた。この喜びを味わうことなく逝った兄嫁を、タミは改めて哀れに思った。

兄がどことなく浮かかない顔をしている。何かを言い淀んでいる。お殿様が京都でお公家様にあつたと言う、あの噂が気がかりなのだろうか。

鳥取藩が幕府と一緒にあって、朝廷と戦うようなことがあつたら……そして朝廷に負けたら、お武家様は浪人になってしまう。

「タミには甘えすぎているな、このところ」

「なんだ。兄ちゃん、そんなことか。他人行儀でおかしいよ」

「坊もすっかり懐いている、まるでタミの子だ」

「その何が悪い。どうせ嫁に行く当てなんかない身だよ。いつまでもあたしがここにるのが邪魔？目障り？」

「そんなこと思っていないよ。バカなことを言うな」

「だったら、坊の面倒見てたつていいね」

「タミ、それが……」

「えっ？今なんて言った？」タミは兄に目を剥いた。

「坊の躰け方が悪いとでも言うの？なんでも兄ちゃんに相談してるし、甘やかしているつもりはないよ」

「タミ、今日は手習いの日だろ、坊を女衆に預けて、休まずに行けよ。」

「なんだよ。話を逸らして狡いよ。いったい、何が言いたんだよ」追いかけて迄かけたタミの声が届いていないはずはないのに、兄は振り向きもしないで出て行った。兄の腹の中が分からない。女衆が戻って来たので、タミも外へ飛び出した。

気を取り直して、家に戻ると、坊が不安げに土間で遊んでいる。互いに目が合うと小さな腕をタミの首に巻き付けて

「ねえ、ターミ、遊びに行こうよ」

「遠くまで歩ける。おんぶなんて言わないかい？」

「ちゃんと、ちゃんと歩けるよ」坊は、飛び跳ねてはしゃいで見せた。

「お馬の通る道を歩いて。みようかね」と言いながら、握り飯を作り、坊に草鞋を履かせ、兄には勿論、女衆にも黙って家を出た。袖垣を閉めて、坊の手を引いて大山富士の頂を仰ぎながら歩きだした。北側の道を朝廷側か幕府側か判らないが、志士たちが意気揚々と行く。

「ねえ……何処に行くの？」

「お参りに行こうね」タミは本堂の脇に建つ子守堂に参りたかった。坊の眼前で兄と遣り合ったことが悔やまれた。見苦しい振舞いはやめよう。

兄に後妻さんが来たら自分は退いて、両親が住んでいた別棟の隠居部屋へ移ればいいのだ。そこで手習いに励めばいい。清次郎さまがいなくても。今までのように手習いに励もうと思った。

「坊、おんぶしようか」何度促しても「ウン」と言わないで、狭い道を面白がつて上がっていく。境内に見知った顔も見える。(清次郎さまではないか)とありそうもないことを想像し、さりげなく人波を見回した。背の高い男は皆、清次郎さまの様な気がする。今日は何の祭りでもないのに、金魚売や、べっ甲飴売りが並んでいる。「あの虫籠が欲しいの？」買ってやると言わない内から坊は飛び跳ねて喜んでいる。明日は二人で虫を取りに行く楽しみが出来た。

子守堂の前でタミは何を祈ってもむなししい気がして涙ぐんだ。

遠く北側の山すそに、手習い所が見える。山の向こうに清次郎さまが学ばれる『尚徳館』がある。改めて清次郎さまの事を思いながら、心地よい風に吹かれながら、坊と二人で握り飯を食べた。

「ねえタミ、飴が欲しい」タミは柄のついた飴を買ってやり「サアおんぶだよ」しゃがむとタミの背中にスンナリ乗って虫籠と飴を握った小さな手をタミの首に巻いた。タミは気を付けて階段を一步ずつ降り始めた。

「階段を降りるまで動くんではないよ。危ないからね」そう言っているのに、タミの首に巻き付いていた坊の手がせわしく動く。背中で飴を舐めているらしい。「ダメだよ。ちゃんと掴まっていなければ」飴がタミの襟首にベタつとついたりその瞬間、タミの足が階段を踏み外した。一段ならず二段も三段も踏み外して、右に大きく傾いて転んだ。片手で支えていた坊は落とさずに済んだが、右足に激痛が走った。立ち上がれない。忽ち人だかりができて、誰かが坊を抱きとつてくれた。すっ飛んだ虫籠が石段の下でヒツシャゲている。罰が当たったんだ。兄ちゃんと喧嘩なんかするから……。みつともない。

「タミちゃん。しょうがないねえ。誰か肩を貸しておやりよ」その早口は酒屋のおかみさん。おかみさんの一声で、有り難いことに屈強そうな40歳がらみの旅人がタミの前に現れた。…….と思っただら次に

「ほんと、しょうがないねえ…….?」その声は紛れもなく清次郎さまの声。

清次郎は手を差し出ししながら、脇に立つ旅人に軽く会釈をすると、ぶつきらばうにタミに背中を向けた。

「ほら立てないんだろう。掴まれよ、タミさん」

脚の疼きと胸の高まりと顔のほてりでタミの頭は真つ白になった。

「おや、おや顔見知りかい。よかったねえ。お兄さんチョツと重たいけどそこまで背負ってやっておくれよ」清次郎の背の上でタミの混乱は収まらない。いかり肩の厚い背中にタミの胸が触れる。手の置きどころがなく、遠慮しながらそつと肩に手を置いた

「坊はあたしが連れっていくから、心配いらないよ」お上さんはさつさと壊れた虫かごを拾って、坊を背負うと足早に去っていった。

人だかりが散って清次郎とタミの二人だけになった。言いようもなく恥ずかしいのは勿論だが、舞い上がりたいほどに嬉しくもある。

「すいません汗をかかせてしまつて」

「なんの、なんの足は痛むかい？」

タミは清次郎の背中で首を振った。なるべく汗をかかないように、なるべく軽く背負われるように、足の痛みに顔をしかめながら精一杯の気を使った。

「つまらないところを見せてしまいました」清次郎の背中に顔を隠しながら、消え入るような声で言えた。

「ああ 本当だ。こんなところでコケてないで早くいい返事をくれよ」

「えっ？」

「昨日兄さんから聞いてくれたと思うけれど。こんな格好で言うつもりはなかったけれど、『尚徳館』の近くに家を借りました。タミさんを迎えたいと思っています」

「……………ありがとうございます。ありがとうございます」心からの叫びなのに声にならずにタミはひたすら清次郎の背中に顔を埋めた。

